芥川龍之介「舞踏会」再編

――〈H老夫人〉の〈ふるまい〉をめぐって――

宮坂覺

一

「舞踏会」は、一九二〇（大正9）年、『新潮』の新年号に発表された作品である。芥川作品の中でも評価は高い。「美しい音楽的な短編小説」（三島由紀夫）、「短いが美しい短編で、開化物の中での佳作」（吉田精一）、「代表的な珠玉編」（中村真一郎）に始まり、近年においても「日本近代小説の名作の一つ」（藤多佐太夫）、「開化期物の傑作」（神田由美子）などと、「舞踏会」に対する好評は変わらない。その「舞踏会」の〈読み〉に対して、揺れやずれがない訳ではない。それは、末尾の改作の問題である。

初出稿において、作品末尾、すなわち、今はH老夫人となっている明子が、三十二年前の鹿鳴館の舞踏会での仏蘭西海軍将校との思い出を語り終えた後のやり取りは、次のようになっていた。

その話が終わった時、青年はH老夫人に何げなくかう云ふ質問をした。／「奥様はその仏蘭西の海軍将校の名を御存知ではございませんか。／するとH老夫人は思ひがけない返事をした。／存じておりますとも。Julien Viaud と仰有る方でした。あなたも御承知でいらつしやいませう。これはあの「お菊夫人」を御書きになつたピエル・ロティと仰有る方の御本名でございますから。」

「舞踏会」は、一九二一（大正10）年三月、第五短編集『夜来の花』（新潮社刊）に「秋」（21・4『中央公論』）、「杜子春」（同・7『赤い鳥』）、「南京の基督」（同、『中央公論』）などとともに収録される。その際に、次のように、末尾が改稿されたのである。

その話が終わった時、青年はH老夫人に何げなくかう云ふ質問をした。／「奥様はその仏蘭西の海軍将校の名を御存知ではご

ざいませんか。」／するとH老夫人は思ひがけない返事をした。／「存じておりますとも。Julien Viaudと仰有る方でございました。」／「では、Lotiだつたのでございますね。あの「お菊夫人」を書いたピエル・ロティだつたのでございますね。」／青年は愉快な興奮を感じた。が、H老夫人は不思議さうに青年の顔を見ながら何度もかう呟くばかりでした。／「いえ、ロティと仰有る方ではございませんよ。ジュリアン・ヴィオと仰有る方でございますよ。」（傍線、引用者）

この改稿の問題は、いまだに「舞踏会」論にとって黙殺出来ない関心事である。例えば、平野芳信は、海老井英次の「より完成度の高い作品を目指しての作家による加筆訂正はよくあることであろうが、これ程の短期間の間に、これ程の訂正が為されなければならなかった例は、芥川の場合には他になく、そこに何があったかを解明することは、芥川龍之介を考える上で看過できない事柄と思われる」[1]の言に、「改稿問題に重大な関心を寄せている」とコメントしたうえで、次のように述べる。

「舞踏会」に関する論考のほとんど例外なく、この改稿問題を避けることがないばかりではなく、しばしば論の中心に据えているほどである。

（「芥川龍之介『舞踏会』論」、'94・12『山口大学　文学会誌』45）

論者は、かつて「『舞踏会』試論――その構成の破綻をめぐって」（'75・2、〈福岡女子大学〉『文芸と思想』39）を発表した。この論は、改稿に対して、従来、概ね肯定的評価であったのに対して、改稿が齎した捩れを指摘した。改稿に否定的ともとれる分析をしたこともあって、二十年以上たった現在でも肯定的であれ否定的であれしばしば引用されている。例えば、

三好行雄「『舞踏会』について――芥川龍之介へのアプローチI」は、この改変の意義を強調し、〈芥川が意識して改作したという事実は、この部分が決して単なる思いつきや落ちではない、小説全体にかかわるもっと具体的な効果が期待されていたこと〉を物語るとし、（中略）改稿を積極的に肯定する説に対して、効果は外面的な成功に過ぎず、そのため却って〈芥川は、この小説のテーマというべき明子の美が犠牲になる事実を看過してしま〉い、結局〈明子の人間像の破綻〉を、ひいては〈構成の破綻〉をも招いた、と否定的評価を下すのが、宮坂覚「『舞踏会』試論――その構成の破綻をめぐって――」である。

この両説によって、改稿に対する諸論の見解の相違は、ほぼ代表されているであろう。（栗栖真人「舞踏会」、'83・3『解釈と鑑賞』）などとされている。さらに、この前稿は、清水康次編〈芥川龍之介作品論集成・第四巻〉『舞踏会――開化期・現代物の世界』（'99・6、

翰林書房刊）において、他の三編[2]とともに再録されてもいる。その意味では、前稿は歴史的意味を持ったようだ。そこでは、先行論同様Julien Viaudがピエル・ロチの本名である事を知らなかったことを前提に立論し、唐突な改稿故に、明子に〈無知な女性になりさがる〉というダメージを与えることに重大な注意が払われていないことを問題にした。〈明子〉の外側から〈読んだ〉手続きと結論に対して修正する用意はない。また、〈明子〉を男性性の視点から〈無知な女性〉として〈読む〉ことは「舞踏会」一編を豊かに読むことではないという考えも変わってはいない。が、H老夫人明子の〈ふるまい〉に注目し、〈明子〉の内側からテクストに迫ったとき、改稿に新たな意味を発見し、時に触れそのことに触れて来た。すなわち、H老夫人明子の〈ふるまい〉の裡に、Julien Viaudがピエル・ロチの本名である事を十分承知しながら、なおも否定したのではないかと考えている（この稿を草するにあたって、最近の「舞踏会」論を整理している過程で、平野芳信が、男性原理の視点を問題にし、殆ど同じ論調で論（前掲「芥川龍之介『舞踏会』論」）を発表していることを知った。氏の論とは無関係に成立していた認識であるが、断っておきたい。また、執筆の過程で氏の論の刺激から問題を整理することも出来た。）そのことは、論者のうちに存在した「舞踏会」論の瑕疵――「舞踏会」の定稿に、〈破綻〉の翳りを指摘しつつも、「これからも芥川の代表的作品であることを認めるに吝かではない」という見解に内包する瑕疵――を排除することにも繋がっている。既に「再版に寄せて」（『芥川龍之介』'98・4、翰林書房刊）、「舞踏会」（関口安義、庄司達也編『芥川龍之介全作品辞典』'00・5勉成社刊）などで多少触れているが、改めて論じてみたい。

二

まず、多少言葉が足りなかったところを補足しながら、前稿の内容を確認しておきたい。前稿では、改稿が『新潮』発表後に出た同時代評、例えば、田中純の「一種の高当落語だ。（中略）最後の落とし方は巧い。」（「正月文壇評二」'20・11『東京日日新聞』）、水守亀之助「外国士官がピエル・ロチであつた事を当年の一少女をして語らせてゐるが、それは唯口を借りた迄であつて、それは作者が読者に向かひ代弁してゐるのが見え透いて、折角の思ひ付も半ば感興を滅殺すると思ふ。」（「新春の創作を評す」、'20・3『文章世界』）などに、影響されあのような改変が為されたとした。すなわち、〈落ち〉に集中した読み取りに、芥川に「芸術その他」（'19・11、『新潮』）で、「自動作用」マンネリズムという語に託した自戒した自らの罠に嵌まったとの認識を齎し、それが改変の底にあった。末尾の改変だけで済むものではなかったが、敢えて、同時代評に見る〈落ち〉の反転で、

その危惧をクリアーしたという推測が成り立つ。あの改変によって、明子像は大きく変貌することになる。

「一」においては、開化期に〈夙に仏蘭西語や舞踏の教育を受け〉、〈仏蘭西の海軍将校〉と互角に渡り合い虜にした深窓の令嬢明子の三十二年後、H老夫人[3]になった今も「鎌倉に別荘」を持ち、青年実業家ならぬ「青年小説家」を周辺におく文化圏に存在している。それゆえに、「存じておりますとも。Julien Viaudと仰有る方でございました。あなたも御承知でいらつしやいませう。これはあの「お菊夫人」を御書きになつたピエル・ロティと仰有る方の御本名ですから。」という言説も違和はない。

改稿では、「Julien Viaud」が、作家「ピエル・ロティ」の本名であることに結びつかないことになっている。当時、ピエル・ロチの本名がJulien Viaudであることを、如何程の読者の常識であったのであろうか。H老夫人となった明子が、それを知らなかったということは、十七歳の明子が「ワットオ」を知らなかった事とどれほどの違いがあったのであろうか。それゆえに、短絡的に「無知な女性になった」と判断するのは問題がありそうに見える。しかし、ここで確認しておかなければならないことは、H老夫人たる明子があのテキスト中から一人置き去りにされて仕舞ったということである。すなわち、作者、語り手、青年小説家、読者は、Julien Viaudがピエル・ロティの本名であることを知っていることが前提となっていることである。でなければ、〈落ち〉は成立しないし、あの末尾の実景は空転するばかりである。その意味において、明子一人が、作品末尾の教養の地平から置き去りにされているということである。となると、三十二年後の明子は、教養ある深窓の令嬢から無知な女性になり下がったことになる。が、それには無理がある。

Julien Viaudがピエル・ロティの本名であることが、一般読者の周知の教養であったか。常識というには、ある限られた読者という限定がつくのではなかろうか。それが、定稿の形にできたのは、実は、初出稿においてその知識を供給したという認識が芥川の裡にあったのではないであろうか。その認識に凭れて、改稿は為されたと考える。定稿のみで、逆手の〈落ち〉が、早急に理解されたかは疑わしい。改稿の際、無意識であったにせよ、読者には初出稿の末尾の〈落ち〉の知識が期待されていたのではないか。このように考えてくれば、H老夫人明子は、この作品の末尾が期待する教養から、一人置き去りにされたのである。そこから、H老夫人明子の〈無知なる女性〉像が構築されたのである。そこから、前稿では、「鹿鳴館時代の華やかなヒロインは、三十数年後には、ジュリアン・ヴィオが、当時広く読まれていた『お菊さん』の作者ピエル・ロチの本名であるということさえも知らぬ女性になり下がってしまってい

る」としたのである。さらに、それは「一」で造形された明子像とは落差を生じ、破綻につながるとした。

三

H老夫人明子を、〈無知な女性〉と捉えるのは「舞踏会」一編の豊かな〈読み〉ではないという見解は、今の時点でも変わってはいない。が、H老夫人となった明子は、三十二年間の人生行路において、〈無知な女性〉に変貌したと言う読み取りは、通説のようだ。そこにこそ、明子の抱く〈思い出〉が美しく凝縮すると読み取る。

年若くして、いち早く西欧文明の洗礼を受けた深窓の麗人も、ついに西欧の文学とは無縁のまま齢を重ねてしまった、という皮肉であろうか。（吉田精一「舞踏会」、〈近代文学鑑賞講座〉『芥川龍之介』、'58・3、角川書店刊）

Julien Viaud が Pierre Loti の本名だという知識を、老夫人はもちあわせていなかった。だから、青年作家よりフランス文学について〈無知〉だといえるかもしれない。

（三好行雄『舞踏会』について―芥川龍之介へのアプローチI」、'71・9　立教大学『日本文学』）

芥川にとって問題は、明子がいかに自覚してどう生きたか、ではなかった。無知な、無自覚な、それだけに無心といえる明子の仕立てられた美しさを、そのまま描き出すことに狙いがあった。（榎本隆司「舞踏会」、文学批評の会編『批評と研究　芥川龍之介』、'72・11、芳賀書店刊）

夫人がそれがロティであったことを知ってはならぬ。それは無知であり続けることによって落差は埋められる事なく、無垢なる感動への哀惜を持続する。（佐藤泰正「舞踏会」、『文学　その内なる神』、'74・3、桜楓社刊）

宮坂覚氏は、改稿により明子の人間像が後退し、構成上の破綻をきたしたと述べている。なるほど、初出では、ヴィオをロティと知っていたのに、改稿では知らなくなったのだから、知的な人間から無知の人間へ、人間像が後退したと言える。（小田切信子「芥川龍之介『舞踏會』研究」、'92・3、『成蹊国文』25）

芥川は、定稿において、フランスの海軍将校がロティであると明かす役割を明子から青年の小説家に変更し、明子はその事実に全く無知であったとした。（笠井秋生「もう一つの『舞踏会』」'92・4『芥川龍之介』第2号）

しかし、前稿でも問題にしたように、H老夫人となった明子像を〈無知〉と構築するのには「舞踏会」の豊かな読みに繋がらない。「舞踏会」の主軸を、仏蘭西の海軍将校に見、「私は花火の事を考えてゐたのです。我々の生（ヴィ）のやうな花火の事を。」に収斂す

る読みを全く否定するものではない。が、それだけでは、「舞踏会」一編は読み切れないことは、前稿で繰り返し述べて来たことだ。その読み取りでは、明子は張りぼてで、徹底的に、内面の欠落した風景としての〈鹿鳴館〉ならぬ、時代に翻弄された〈鹿鳴館的女性〉ということになる。最初から最後まで、「舞踏会」という作品空間において、空っぽの役割を果たしていることになる。しかし、H老夫人明子を〈無知〉としながらも、張りぼてとして論じ切っている論を見ない。無知〈にもかかわらず〉、無知〈ゆえに〉明子の〈三十二年前の思い出〉は純化され美化されるという。しかし、この言説は、一つの側面を惹起しないか〈私自身も、前稿の時点では無自覚であった〉。その〈読み〉には、男性性に囚われた側面が孕んでいないか。あるいは、優位なものが孕んでいないか。

前稿で、定稿の言説からH老夫人明子を自明のように〈無知〉と読んだ。それは、二で展開したように、「H老夫人明子は、この作品の末尾が期待する教養から、一人置き去りにされたのである。そこから、H老夫人明子の〈無知なる女性〉像が構築されたのである」。さらに、「鹿鳴館時代の華やかなヒロインは、三十数年後には、ジュリアン・ヴィオが、当時広く読まれていた『お菊さん』の作者ピエル・ロチの本名であるということさえも知らぬ女性になり下がってしまっている」と〈もちろん、H老夫人明子が無知な女性ではないことが本意ではあったが〉。H老夫人明子に〈無知〉の影を添わせることで、「舞踏会」の〈破綻〉や痩衰の問題を指摘したままに終わっていた。すなわち、H老夫人明子が〈無知〉な女性では、「舞踏会」は手放しには豊かに読めないとしたが、その時点ではテキストの読みにおいては、一種のアポリアの中にいたのかもしれない。「一」の明子は聡明であったのに、改稿によって「二」のH老夫人明子は、〈無知〉な女性に改変され捩れを生じ、延いては、構成の破綻を惹起することを指摘したが、そこでは定稿の末尾の明子像を〈無知〉を前提にしていたことになる。確かに本意ではなかったにしろ、その意味では、平野芳信が、

さきに引用した三好氏と宮坂氏と一見反対とも思える解釈でさえ、ともに明子が無知であるという前提による立論である点で共通していることはいうまでもない。〈前掲「芥川龍之介『舞踏会』論」〉

と、指摘しているが、結果的には抗する言を前稿では有していなかった。〈無知〉ではまずいことを指摘しても、次の〈読み〉を引き出していなかった。が、前稿以後、何度か読み直すなかで、うすうす気づいていたアポリアに活路が見えて来た。「舞踏会」を作者芥川の人生の呪縛から逃れて、テキストとして読み直したときH老夫人明子の内により寄り添って読み始めたとき新たな読みの地平

が開けたのである。それは、既に一で述べたように、H老夫人明子は、その〈ふるまい〉の裡に、Julien Viaudがピエル・ロチの本名である事を十分承知しながら、なおも否定したと読み取れ始めたからである。

四

かねがね、「舞踏会」の〈読み〉に、海軍将校に注目するあまり、明子の検証が薄いと考えていた。自覚的にないにしろ、それは、男性性の視線による〈男書き〉のもつ陥穽に嵌まって、男性性の視点に重ねられて読まれていたことによるのではないか。前稿もそのような釈然としないものが背景があったと信じている。いま思えば、「『南京の基督』論——金花の〈仮構の生〉に潜むもの」（'76・2『文芸と思想』40）なども、金花の側から〈読んだ〉のは、そのような不満があったからであった。近代文学自体が男性の視線による、〈男書き〉の言説によって成立していることが多いことは否めない。婦人参政権が認められてから、欧米でさえ一〇〇年に足らない（アメリカで'20年婦人参政権の為の憲法改正の各州の批准完了、イギリスで'28年男女平等の普通選挙実施。参政権が認められるのは多くは第一次大戦後、フランスが'44年、イタリアが'45年と遅れた）。日本においては、半世紀余年が経過したところである。そのような状況にあって、〈男書き〉の言説の限界を認識しておかねばならない。かねがね、〈男書き〉の言説のなかにある〈男性性の視線〉に、重ねて〈読ま〉ねばならないことはないと考えている。それによって、テキストから漏れるものがあるとするならば、それは、大きな損失である。復権への試みの〈読み〉の自由は、保証されている。が、明子は、まだそのような〈読み〉に晒されているようだ。

平野芳信は、前掲論で、

なぜ明子は無知でなければならないのか。いやそうではない。彼女は無知であることを強いられているのだ。そういえば語調が強すぎるなら、読者も、批評家も、研究者も、そして作者すらも、無意識のうちに男性性という視線のフィルターで、女性性としての明子にそうあることを望んでいるのだ。我々はひとしなみに男性性の原理、言語、意識に深く深く絡めとられていたのである。

と、鋭く述べる。筆の滑りを感じない訳ではないが、概ね、同感する。しかし、「作者すらも」ではなく、「舞踏会」に関して言えば「作者こそが」、大正という時代性の中で〈男性性という視線のフィルター〉に囚われていたのだ。だからといって、芥川の問題性を指摘したところで、「舞踏会」と言うテキストを読んだことにはならない。問題なのは、それを齟齬もなくなぞって仕舞った、仕舞って

いる〈批評家も、研究者も〉である〈読者には、もっと自由な〈読み〉が存在したであろう〉。さらに平野は続けて言う。

たとえば〈論者注、三好氏、宮坂は〉、〈中略〉女であるゆえに明子が何も知らないにちがいないという思い込みそのものには、なんら疑問はさしはさまれてはいないではないか。そこには男の無意識のうちの前提が伏在しているとしか私には思えない。

〈女であるゆえに、明子が何も知らないにちがいないという思い込みそのものには、なんら疑問はさしはさまれてはいないではないか。〉とは、いわれなき氏の〈思い込み〉である。恐らく、平野の言説は、個人的な批判よりも男性原理にまだ囚われている〈読み〉に対するものが本意であると考える。が、〈女であるゆえに〉というのは、誠実な読み取りではない。にも拘わらず、H老夫人明子を〈無知〉と認定すると、このように解釈される余地を残す。すなわち、「一」の中盤まで、内実をもって描かれていたと思われる明子は、実は海軍将校の説く言説の背景であり、遠景に処理されるものでしかなかったことになる。最初から、薄っぺらな立体感を有しない個性として描かれる宿命を負わされていたことになる。前稿でも述べたとおり、H老夫人明子が〈無知〉〈無垢〉なる故に、彼女の思い出が美化されるという言い回しを私は採らない。そこには、〈見下ろしながら〉教へる海軍将校、〈愉快な興奮〉を感ずる青年小説家の視線、すなわち男性性が濃厚な視線に偏向された風景が立ち上がって仕舞うからだ。

他者の思いを断定する誤謬を犯したくないが、前述したように、平野のイライラした文体に通底するものは、私が感じていたものと同質なものを感じている。氏が、そこから導き出したものは、

青年作家の若さゆえの知的興奮をよそに、「いえ、ロティと仰有る方ではございませんよ。ジュリアン・ヴィオと仰有る方でございますよ」と「不思議さうに青年の顔を見ながら何度も」呟く明子の行動は、知っていたにもかかわらず、知らぬといえる成熟した処世術のなせる技であった。

論者も、時に触れ漏らしてきたが、H老夫人明子は、Julien Viaudがピエル・ロチの本名である事を百も承知で、敢えて否定したと考えている。とすれば、前稿で「一」での明子像が、「二」においてのH老夫人となった明子に落差は生じない。開化期に〈夙に仏蘭西語や舞踏の教育を受け〉、〈仏蘭西の海軍将校〉と互角に渡り合い虜にした深窓の令嬢明子の三十二年後、H老夫人明子なった今も「鎌倉に別荘」を持ち、青年実業家ならぬ「青年小説家」を周辺におく文化圏に存在していることと整合性をもつ。では、H老夫人明子は、なぜ否定しなければならなかったのか。

金花の話が終わつた時、彼は思ひ出したやうに燐寸を擦つて、匂の高い葉巻をふかし出した。さうしてわざと熱心さうに、こんな窮した質問をした。／「さうかい。それは不思議だな。だが、――だがお前は、その後一度も煩はないかい。」／「ええ一度も。」／金花は西瓜の種を噛りながら、晴れ晴れと顔を輝かせて、少しもためらはずに返事をした。

とは、「舞踏会」から七カ月後に発表された「南京の基督」の末尾である。かつて、「南京の基督」における金花と日本人旅行者の関係と、H老夫人明子と青年作家の関係の同質性を論じた（前掲「『南京の基督』論――金花の〈仮構の生〉に潜むもの」）ことがある。ここにおいて、金花やH老夫人の〈生〉は、日本人旅行者や青年作家の〈生〉を遥かに上回っていることを指摘した。金花の確信ゆえに、日本人旅行者はたじろぎたゆとうている。「舞踏会」では、青年作家の〈愉快な興奮〉は、H老夫人明子の感慨とより乖離していることは明らかであろう。さらに言えば、青年作家の〈愉快な興奮〉とH老夫人明子の感慨はコードを異にする。青年作家の〈愉快な興奮〉は、まだ自分が生まれる以前の三十二年前、『お菊さん』の作者ロティとクロスしたことがあると言う知人の女性の意外な事実への好事家的知的好奇心に裏打ちされたものである。H老夫人明子の感慨はどうか。恐らく、彼女の三十二年間を通底して来た〈舞踏会デビューの日〉〈異文化体験の日〉の思い出なのである。以来三十二年の人生行路のなかで、恐らくワツトオが何者であるか、花火のような〈生〉とは如何なることかを既に熟知していたことであろう。それを知ったうえで、青年作家に〈思い出〉を語った。熟知していたからこそ、この思い出がなお鮮明であったと考えたい。過去の思い出ではあるが、彼女にとって永遠の時であり、今も現在形で語れる感慨が裏打ちされていたのである。ワツトオが何者であるか、花火のような〈生〉とは如何なることかの解説を捨象した（明子自身がその解説なしで語ったかについては不明であるが、その語りの再編集とおもわれる「一」の語りでは、少なくともそうなっている。）に触れなかったのは、或いは青年作家の視線に寄り添った「一」の語りである。〈大正七年にの秋〉に青年作家が聞いた話を、男性性の視線で何者（青年作家かもしれない）かが、物語として再編集したのである。語りたいように明子の編集した物語をさらに再編集しているのだ。それゆえに、「一」におけるシテとワキの緩やかな反転が起きているのだと捉えたい。とすると、思い出を語っているH老夫人明子は、男性性の視線で歪曲されているかにみえる。もう一度繰り返すが、十七歳の時は兎も角、四十九歳の明子が、ワツトオが何者であるか、花火のような〈生〉とは如何なることかも解らずに、歴史的事実を等身大に青年作家に語ったとは考え

にくい。解っていたからこそ、海軍将校とも思い出が思い出でなく現在形として語ることが可能だったのではないか。すなわち、海軍将校は、Julien Viaud なる海軍将校であって、後ロティという作家になったという知識は彼女の語るコードには存在しない。ならば、Julien Viaud が、Loti の本名であるかどうかともクロスしない。むしろ彼女の中では、この時点では、クロスしてはならない。クロスすることは、彼女が、彼女にとって価値のない、青年小説家の歴史的事実への好事家的知的好奇心のコードに取り込まれて仕舞う結果となるからだ。それは、目の前で展開させた大切なものが痩衰する姿を目撃することになる。それは彼女には認めることが出来なかった。それを、回避するためには、〈青年の顔を見ながら〉「いえ、ロティと仰有る方ではございませんよ。ジュリアン・ヴィオと仰有る方でございますよ。」と〈何度もかう呟〉かざるをえない。

ここで、H老夫人明子と青年の小説家との会話をもう一度検証して見たい。

「存じておりますとも。Julien Viaud と仰有る方でございました。／では、Loti だったのでございますね。あの「お菊夫人」を書いたピエル・ロティだつたのでございますね。」／青年は愉快な興奮を感じた。が、H老夫人は不思議さうに青年の顔を見ながら何度もかう呟くばかりでした。／「いえ、ロティと仰有る方ではございませんよ。ジュリアン・ヴィオと仰有る方でございますよ。」（傍線論者）

ここで、呼称や呼称の表記、時制を書き分けている事実は注目に値する。「Julien Viaud」→「ジュリアン・ヴィオ」、「Loti」→「ピエル・ロティ」→「ロティ」、「でございました」→「だつたのでございますね」→「ございませんよ」「ございますよ」の書きわけである。「二」の語りの方が「一」より編集作業において、同じ男性性の視線であるとしても手が加わっていないと考えられるが、縦しんば加わっていたとしてもこの書き分けは何を意味するのであろうか。

「Julien Viaud」→「ジュリアン・ヴィオ」には、H老夫人明子が、Julien Viaud をカタカナ発音にし直したのが窺える。それは、好事家的知的好奇心をもった青年作家への暖やかな拒絶を読み取ることが出来る。「Loti」→「ピエル・ロティ」には、青年小説家がH老夫人にむけて、ファースト・ネームを補足し、さらにカタカナ発音にすることによって、明子を取り込もうとした意欲が読み取れよう。にも拘わらず、H老夫人は、「ピエル・ロティ」を「ロティ」に改変して応答し、さらに前述したように、「ジュリアン・ヴィオ」とカタカナ発音に再編集しているのである。さらに、H老夫人明子が「でございました」と結んだのに対し、青年小説家はやはり過去

時制で「だつたのでございますね」と応答している。が、ここで看過してはならないことは、H老夫人明子が、青年小説家に「ございませんよ」「ございますよ」と現在時制で答えていることである。同じコード内で応答するなら、彼女の答えは、過去時制でよかった筈である。H老夫人明子は、青年小説家を彼女自身が連れていった筈の――結局は青年小説家は思いもよらない好事家的知的好奇心に彩られた空間に立ち上がってしまい、彼女の感慨とコードが違ったことが判明するが――青年独自の〈三十二年前〉の世界に置き去りにした。そして、明子は、ロティならぬ、Julian Viaud のいる世界（三十二年前には作家ロティは存在しない）、ロティとは無縁な世界、青年小説家も立ち入れない世界に立ち戻った。それを現在時制で語ることで、彼女の〈今〉に引き寄せた。過去時制から現在時制への改変に背後には、このようなH老夫人明子の心理的バリヤーの機能と、その結果として三十二年前の出来事が〈永遠の一瞬〉として、今も彼女の時間に保持されたのである。

「舞踏会」の唐突な改稿は、一九二一（大正一〇）年という時間の地平に影響され、読み支えられて、H老夫人明子を〈無知〉な女性、〈無知〉故に美しいなどといわれなき美化を付与されてきた。H老夫人明子にとっては、傍迷惑である。H老夫人明子の視線によって読めば、青年小説家（若年の男）には及びも付かない、〈老〉のなかに秘められた〈聡明さ〉が読み取れるのである。

注

（1）『『文明開化』と大正の空無性　芥川龍之介『舞踏会』の世界」（'93・10、『近代日本文学』49）

（2）三好行雄「青春の〈虚無〉――「舞踏会」の世界」（『芥川龍之介論』、'76・9、筑摩書房刊）、海老井英次「『文明開化』と大正の空無性――芥川龍之介「舞踏会」の世界」（前掲）、島内裕子「『舞踏会』におけるロティとヴァトーの位相」（'95・3『放送大学研究年報』）

（3）神田由美子は、「未婚の少女から既婚の老女へという単純な年齢的変化とともに、個性を抑圧し男の付属物として生きる」（「舞踏会」関口安義編『アプローチ　芥川龍之介』'92・5、明治書院刊）と述べている。後述しているように、〈青年〉を意識して〈老〉を付し、さらに、匿名化することによって、三十二年間という時間の空白にを読者に感取させようとしたものと捉えている。

（本学教授）